

松江城下町の造成に関する諸問題と今後の展望

河原 莊一郎

1. 松江開府直前の景観

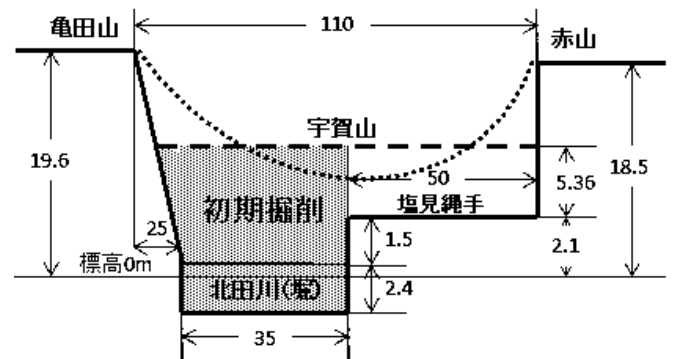
砂州上に末次と白潟の街があった。大橋川の北側（北田町と南田町の東部、学園南）には水草の繁茂する湿原が広がり、さらに北側（学園から大輪町）には「松江湖」が広がっていた。出雲国風土記に記載された城山（亀田山）の東にある「法吉坡」は既に開発され、「ふけ田」となっていた。城山に近い殿町、母衣町、奥谷町や石橋町には「田（乾田）」が広がり、湿地との間（北田町と南田町西部）には「湿田」や泥の深い「ふけ田（深田）」が広がっていた。

2. 城下町の造成

- 城下町の建設についての一次史料はほとんど残されていない。（物語）
- 亀田山と赤山の間にあった宇賀山の掘削は難工事
⇒ 宇賀山は砂山であったので、比較的簡単に掘削が可能。
- 宇賀山の掘削土で南・北田町・中原町の沼沢地を埋め立てた。（『島根県史』）
⇒ 土質試験より築城時の埋め土では、松江歴史館と裁判所での2箇所に限定的。多くは堀・溝の浚渫土。
- ✓ 築城時以外も嵩上げを行った原因および時期は？ → 地盤沈下、浸水、新築

3. 宇賀山の掘削土の行方

- 宇賀山の掘削は2期にわたる工事。塩見縄手と武家屋敷地は2期目
→ 『堀尾期城下町絵図』は、寛永5（1628）～寛永10年（1633）に作成
- 初期工事の掘削土量は10.1万立方メートルで、その57%が松江城に使用。外曲輪＋土塁・馬溜・大手前
- ✓ 残りの掘削土はどこに使われたのか？



4. 雑賀町の造成

- 『出雲国松江城絵図』（正保年間（1644～1648）～現在も雑賀町の屋敷地が南北の縦長に対し、『堀尾期松江城下町絵図』や『寛永年間松江城家屋敷之図』（寛永11～14年（1634～1637））では屋敷地が東西の縦長。
→ 堀尾期や京極期には計画段階で未整備。松平期になってすぐに城下町で最後に整備。
- 水域や沼沢地であった。 → 発掘調査が少ないので、ボーリング土質柱状図より旧地表面を推定。

5. 天神川の開削

未投稿

- 斐伊川東流の時期 寛永12年（1635）→ 『出雲国図』（寛永10年（1633））
- 天神川は微高地の白潟砂州を横断する川なので、人工河川。
- 防御、浸水対策、天神橋東側の陸地化促進 ふけだ（深田）～あさだ（浅田）『出雲国松江城絵図』
- ✓ 天神川は堀尾期に開削されたのか？ → 『堀尾期松江城下町絵図』では天神橋東側に土堤があり。